

AMD Aの挑戦

>2<

相互扶助の「世界」

阪神大震災の発生当日にいち早く被災地入りし、救援活動を始めたAMD Aの医療チームは大きな注目を集めた。しかし、後方支援基地となった岡山市のAMD A本部で、近くのお年寄りや

シルバークommunityは連合町内会や婦人会など地元八団体が構成。お年寄りのボランティアが通所のお年寄りたちと一緒にカラオケや詩吟などを楽しんでいる。緊急救援と同様、地域医療を活

アが神戸から持ち帰るごみの分別にも取り組んだ。

また、平津地区婦人会は一月近くわたって、炊き出しを実施。連日、被災地向けのおにぎりやボランティアのための弁当を供給した。肉や魚など調理材料は、地元の岡山一宮農協(丹原一太組合長)が無償提供した。婦人会代表の原君子さん(みん)は「テレビで見

ていけばネットワークが有効に機能すると考えるからだ。

十月にはAMD Aの提案で、災害時の緊急救援を円滑に行うため、アジア太平洋地域十四カ国のNGOが参加するアジア太平洋緊急救援ネットワーク(APRO)が発足した。「ただ援助に行くだけでは何もできない。海外、国内とも理念は同じ。地域に根ざしたネットワーク」がAMD Aの活動を支えている。(一色 昭宏、つづく)

カギは地域との連携

婦人たちが重要な役割を果たしていたことは、知られていない。AMD Aの活動のカギはここにある。

「AMD Aがぐんと身近になった」。AMD A本部がある菅波医院で、お年寄りのデイケアを行っている地元、平津学区のシルバークommunity運営委員会の原毅代表は「こは震災後の一カ月をそ

助の柱に掲げるAMD Aの菅波代表が地元の要望に応え院内の一室を提供、設立された。

「十年間隣にいながらAMD Aの活動に参加したことはなかった。忙しそうにしているのを見てお手伝いしたかった」と原さん。

シルバークommunityは活動をいったん中断。連日、援助物資の仕分けと積み込み、ボランティア

るだけで雲の上のような存在だったが、一緒に体を動かしてAMD Aの活動が理解できた」と、震災救援で地元とAMD Aの連帯感が強まったと指摘する。

NGOのほとんどが東京や大阪など大都市に集中している。だが菅波代表は「岡山にあることに意義がある」と強調する。大都市のように人口集積はないが、地元に着着し



全国から集まった援助物資。地元の人たちが手際よく仕分けして送り出した。AMD A本部で